

# 琉球大学学術リポジトリ

## 学生の教員資質向上のための認定試験制度の検討（1） －基礎力の評価について－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2011-04-13 キーワード (Ja): 教員資質向上, 認定試験, 教員になる意欲 キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 等, Hirose, Hitoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/19042">http://hdl.handle.net/20.500.12000/19042</a>

## 学生の教員資質向上のための認定試験制度の検討(1)<sup>1</sup>

－基礎力の評価について－

廣瀬 等\*

### A Study of the Verification Examination System for Improving the Students' Teacher Quality (1): Evaluation of Basic Quality

Hitoshi HIROSE\*

本研究では、琉球大学教育学部において、平成18年度より試行実施されてきた、学生の教員資質向上のための認定試験(基礎力に関する試験)について、その効果を確認するとともに、今後の改善も視野に入れて、3年次及び4年次の全学部生を対象に実施した調査結果の分析、検討を行った。その結果、教員志望の程度が高い学生ほど認定試験を受験しており、また、認定試験が学生に対して、教員になる意欲を高めることと、教員になるために役立つという認知をもたせることに効果を及ぼしていることなどが示唆された。

キーワード：教員資質向上、認定試験、教員になる意欲

#### I. はじめに

琉球大学教育学部では、平成17年度より「今後の教員養成・免許制度のあり方について」の最終答申に至る教員養成に関するいくつかの答申・議論にそって、教員養成のパワーアップを図る改革を進め、学生の実践力、授業力の育成・向上を目指してきた。具体的には、平成16年度までは3年次での「学校教育実践研究」と「教育実習」のみであったが、平成17年度から、学生の子ども理解と実践的指導力を高めるためのカリキュラムとして、「教職体験Ⅰ」及び

「教職体験Ⅱ」を新設し、1年次から4年次までの教育実習の体系化を図った。1年次には「観察と参加による学び」(附属学校)、2年次には「子どものふれあいと子ども理解」(公立学校)、3年次には「先導的実践への参入」(附属学校)、4年次にはオプションで「応用実習」(公立学校)という4年間で一貫した実習の体系化を行った。これらのシステム化により、教職への動機づけを高め、子ども理解及び教職理解を深め、教職実践力の形成を目指した。「教職体験Ⅰ」では、1年次において、附属学校の教育や教育

\*琉球大学教育学部(学生生活委員会 認定試験WG長)

<sup>1</sup>本研究は平成20-21年度科学研究費補助金 萌芽研究(課題番号20653042 実践的指導力を高めるための教員資質認定試験制度の検討, 研究代表者: 廣瀬等)の助成を得た。本研究の連携研究者は5名(島袋恒男, 小田切忠人, 田吹亮一, 福田英昭, 望月道浩)である。

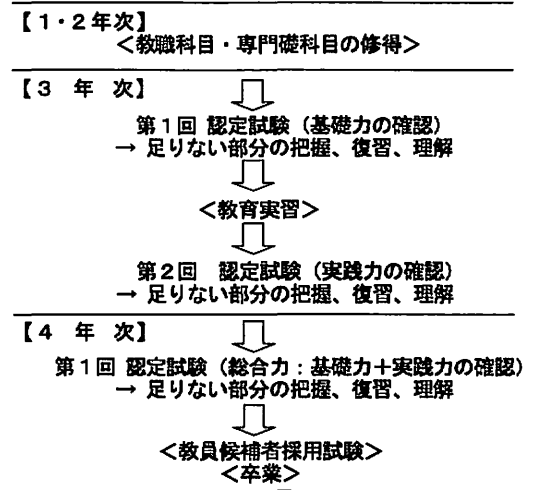
活動に日常的・継続的参加することによって、教職への意欲を高め、教員に求められる実践的指導力の基礎を習得することを目的とした。また、「教職体験Ⅰ」を終えた学生を対象とする「教職体験Ⅱ」では、公立学校において、担任の指示により、子どもへの学習指導を行ったり、休み時間にいっしょに遊んだりして子どもが学校にいる時の教員の仕事について、体験、理解することを目的とした。

「教職体験Ⅰ」及び「教職体験Ⅱ」の新設によるカリキュラム改革と並行して、認定試験による学生の教員資質の向上も検討されてきた。平成17年7月の第13回学部将来構想・運営委員会において、教育実習前後の教員資質の確認のための認定試験について、提案があり、就職対策の一環としても意味があるという意見もあり、検討していくことになった。平成17年8月には、認定試験に関する第1回目の検討ワーキングが開催され、平成18年度より学生生活委員会認定試験WGにより、学部3・4年次の希望者を対象にして、認定試験(試行)が実施されてきた。認定試験では、教員になるための幅広い教養と、教科等の専門的知識・技能について試験を行い、その結果をフィードバックすることにより、教員になるための意欲、知識、実践力をさらに高めることを目的としている。

具体的には、認定試験は、以下に示す3つの認定試験から構成される。①3年次の教育実習前に実施する「基礎力認定試験」、②3年次の教育実習後に実施する「実践力認定試験」、③4年次の教員候補者選考試験前に実施する「総合力認定試験」。最初の「基礎力認定試験」では、教育実習に先立ち、教育実習での基礎となる教職教養、教科の基礎力、及び一般教養について試験が行われ、その結果に基づいて指導を行うものである。実り多い教育実習のためには、まず基礎力の充実が求められる。学生は自分の不十分な部分を理解し、補習した上で、教育実習を行うことになる。次の「実践力認定試験」では、教育実習での学習を踏まえ、どれほどの実践力が身についたかを確認する試験である。具体的には、与えられた内容についての指導案

を作成し、その評価、及び指導を行う。さらに、「総合力認定試験」では、一般教養・教職科目、教科の基礎といった「基礎力」に加え、指導案の作成による「実践力」を総合的に試験する。なお、「基礎力認定試験」は、「総合力認定試験」と同時に実施し、基礎力の部分のみを課すものとする(表1)。カリキュラムとの連動によるこれらの認定試験により、一層の実践力、授業力の育成・向上が期待される。

表1 学部のカリキュラムでの関連における認定試験の位置づけ



この認定試験制度では、本学部の教員が試験問題の作成、採点も行う。このことにより、担当授業での学生の理解力の確認だけでなく、4年間を通しての実態の把握、及びそれを担当授業へ反映させることも視野に入れている。一方、学生にとっては、試験を受けることにより、自分の理解度の確認ができ、得意・不得意の把握もできる。試験結果に基づき、具体的な目標を立てることができることから、動機づけにもよい影響を与えると考えられる。認定試験後は、認定試験解説セミナーも開催されており、学生と教員の相互作用が促進されるような仕組みとなっている(図1)。

平成20年度の認定試験では、まだ「基礎力」の部分のみの試験となっており、次年度から「実践力」部分の試験も加えていくことを予定

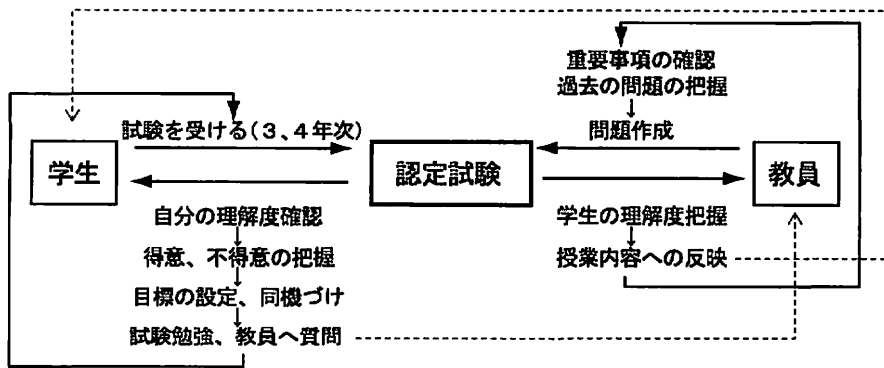


図1 認定試験をととしての学生と教員の相互作用

していた。認定試験では、試験問題の作成、採点など教員側には多くの負担を強いている面があり、認定試験の効果について確認する必要がある。さらに、学生の要望を確認することにより、さらに良い認定試験への改善に生かす必要があると考えられる。そこで、本調査では、認定試験の効果について確認するとともに、今後の認定試験の改善も視野に入れて、認定試験に関する学生の意識を質問紙により調査することを目的とする。

## II. 方法

**調査期間** 平成20年1月28日～2月18日に実施された。

**調査対象** 琉球大学教育学部の3年次及び4年次の全学部生であった。

**調査方法** 各専修・コースの学生生活委員に調査用紙の配付、および回収を依頼した。

**調査内容** 1) 所属課程(1.学校教育教員養成課程/2.生涯教育課程), 2) 学年(1.3年次/2.4年次), 3) 教員志望の程度(5件法: 1.まったく志望していない/2.あまり志望していない/3.少し志望している/4.非常に志望している/5.わからない), 4) 認定試験の受験の有無(1.受験した/2.まったく受験していない), 5) 解説セミナーの参加の程度(3件法: 1.全く参加していない/2.少し参加した/3.よく参加した), 6) 「認定試験が教員になるための意欲を高めるか」についての認知(5件法: 1.まったく高めない/2.あまり高めない/3.少し高める/4.非常に高

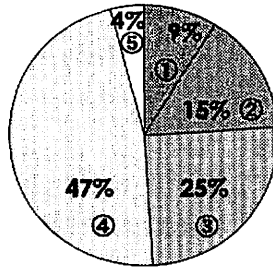
める/5.わからない), 7) 「認定試験が教員になるために役立つか」についての認知(5件法: 1.まったく役立たない/2.あまり役立たない/3.少し役立つ/4.非常に役立つ/5.わからない), 8) 認定試験についての意見, 要望等(自由記述), 9) 大学や学部に見る, 教員候補者選考試験に向けての就職支援についての意見, 要望等(自由記述)について質問紙により調査した(具体的な内容については、付録参照)。

## III. 結果と考察

1) 回収率 教育学部の学校教育教員養成課程の在籍数は、3年次117名、4年次121名であり、生涯教育課程の在籍数は、3年次98名、4年次106名であった。回収された調査用紙は、学校教育教員養成課程の3年次75名、4年次71名であり、生涯教育課程の3年次44名、4年次28名であった。全体では218名、回収率は49%であった。

2) 教員志望の程度 教員志望の程度については、「少し希望している」と「非常に希望している」とを合わせると72%となり、「まったく志望していない」と「あまり志望していない」を合わせた24%より3倍多くなっていることが示された。また、「わからない」も4%存在することが示された(図2)。

3) 認定試験の受験について 「今年度、1回でも認定試験を受験しましたか」という質問に対して、「受験した」が53%、「全く受験し



- ① まったく志望していない
- ② あまり志望していない
- ③ 少し志望している
- ④ 非常に志望している
- ⑤ わからない

図2 教員志望の程度 (N=218)

ていない」が47%であった。19年度は、5月と11月の2回、認定試験を実施したが、1回でも認定試験を受験した割合と、受験しなかった割合が、ほぼ同じであったことが示されたといえる。

4) 認定試験の受験と教員志望の程度との関係 認定試験の受験の割合を教員志望の程度との関係でみると、教員への志望が高いほど、受験者の割合が高いことが示された。例えば、「非常に志望している」場合、75名(74%)の学生が認定試験を受験したが、「まったく志望していない」場合、2名(10%)の学生のみが認定試験を受験した(図3)。

これらの結果は、教員の志望が高いほど認定試験を受験していることを示しているといえる。ただし、教員を志望しているかどうか「わからない」学生も60%が受験しており、認定試験によって自分が教員になれる知識があるかどうかを確認する試験として活用しているとも考えられる。

5) 認定試験が教員になる意欲を高めるかの認知 「認定試験は、教員になるための意欲を高めると思えますか」という質問に対する回答を受験経験別に検討した。その結果、実際に認定試験を受験した学生は、「少し高める」と「非常に高める」を合わせると101名(88%)を占め、「まったく高めない」と回答した学生は0名(0%)であった。まったく受験していない学生は、56名(54%)の学生が「わからない」と回答し、「少し高める」と「非常に高める」を合わせると41名(40%)であった(図4)。

受験をした学生の「少し高める」と「非常に高める」を合わせた割合が88%を占めたという結果は、認定試験が教員になる意欲を高めていると多くの学生が認知していることを示しているものといえる。また、まったく受験していない学生の半数程度が「わからない」と回答していることは理解できるが、残りの多く(40%)がまったく受験していないにもかかわらず、教員への意欲を高めると回答したのは、興味深い結果である。これは、例えば、身近に認定試験の受験をした学生の話がいて、その話を聞き、教

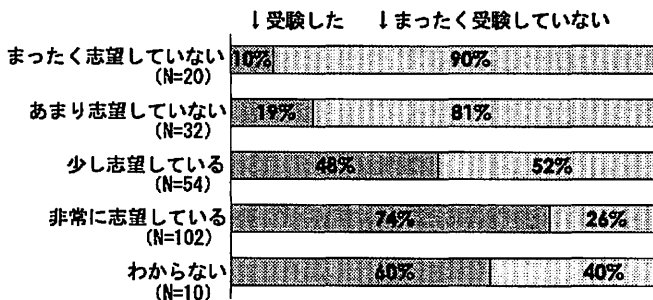


図3 教員志望別の受験経験割合

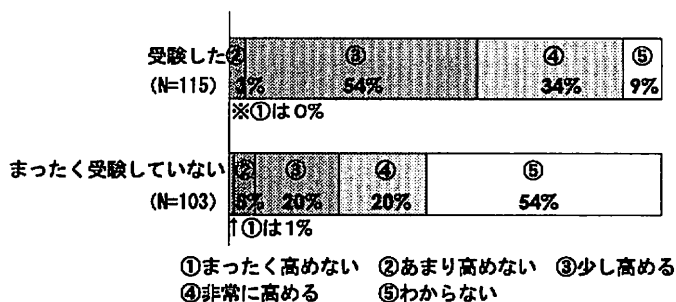


図4 受験経験別、認定試験の意欲向上効果の認知

員になるための意欲を高める効果を間接的にでも実感したりしたものとも考えられる。なお、受験をしたにも関わらず、少数ではあるが、「あまり高めない」(3%)と回答したり、「わからない」(9%)と回答している学生も存在しており、これは今後の課題である。

6) 認定試験が教員になるために役立つかの認知 「認定試験は、教員になるために役立つと思いますか」という質問に対する回答を受験経験別に示した。実際に認定試験を受験した学生は、「少し役立つ」と「非常に役立つ」を合わせると102名(89%)を占め、「まったく役立つ」と回答した学生は0名(0%)であった。まったく受験していない学生は、59名(57%)の学生が「わからない」と回答し、「少し役立つ」と「非常に役立つ」を合わせると41名(40%)であった(図5)。

受験経験別の認定試験の役立ち効果の認知の結果は、先に示した受験経験別の認定試験の意欲向上効果の結果と非常に似ているといえる。

これは、認定試験が学生に対して、教員になる意欲を高めることと、教員になるために役立つという認知をもたせることに同様に効果を及ぼしているためと考えられる。

7) 認定試験についての意見、要望等 自由記述欄に回答があったのは、54名(25%)であった(「特になし」等は除く)。多様な意見、要望が出されたが、「問題用紙を持ち帰りたい」、「認定試験の内容や回数など充実させてほしい」、「フィードバックを充実させてほしい」などの内容が多かった。平成20年度までは、認定試験の問題用紙は持ち帰らせておらず、後日、事務窓口にて閲覧のみが許されていた(学生からの要望を受けて、平成21度からは問題用紙の持ち帰りを認めるように変更している)。また、認定試験やそれに続く解説セミナーに積極的に参加している学生ほど、認定試験に関する充実を求める意見を多く記述していた。なお、平成21年度からは「実践力」に関わる試験を追加するなど、より充実した形で提供している。

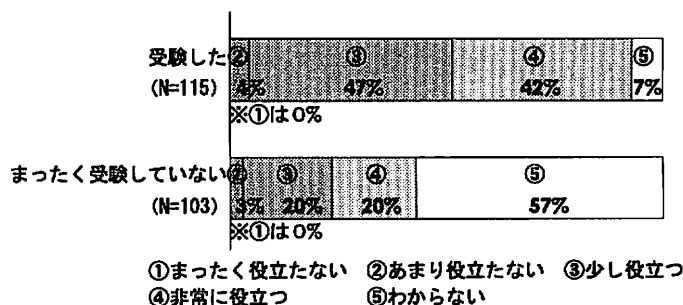


図5 受験経験別、認定試験の役立ち効果の認知

#### 8) まとめと今後の課題

教育学部全体での教員志望率は、「少し希望している」と「非常に希望している」とを合わせると72%となり、多くの志望学生がいるといえる。ただし、認定試験の受験率は、全体で53%となっており、教員を「非常に志望している」学生でも74%、「少し志望している」学生では48%にとどまっていた。受験した学生の87%は、認定試験が教員になるための意欲を高めると評価しており、また、受験した学生の89%は、認定試験が教員になるために役立つ評価している。このような結果からも、教員志望の学生にとって、認定試験は有効な試験であると考えられる。そのため、学生からの意見、要望等も参考にして、今後、より受験率を上げる工夫が求められるであろう。

なお、今回の調査は、全体的な状況を確認するための概略的な調査であり、今後、学生の認

定試験に対するより詳細な調査を実施していく必要がある。また、問題の作成、採点、フィードバックを行っている教員側に対しても、認定試験についての意識調査を行う必要があろう。認定試験は、学生にとっては自己の状況を確認・反省できる機会であり、教員にとっては担当授業での学生の理解力の確認だけでなく、4年間を通しての実態の把握、及びそれを担当授業へ反映させることなどができる機会である。これらの利点がどの程度理解され、また活用されているかを調査することにより、認定試験の実施についての、より具体的な改善が検討できると考えられる。

#### IV. 付 記

本研究の一部は、沖縄心理学会第37回総会(2009)において発表された。

## 認定試験についてのアンケート(3、4年次対象)

学生生活委員会  
認定試験WG

教育学部では、教員になるための幅広い教養と、教科等の専門的知識・技能について試験を行い、その結果をフィードバックすることにより、教員になるための意欲、知識、実践力をさらに高めることを目的として、今年度も認定試験を実施しました。皆さんにとって、よりよい認定試験とするため、以下のアンケートに回答をお願いします。3、4年次の全ての学生(教員志望でない学生も含む)が回答してください。

提出期限：2月18日(月) 提出先：所属の学生生活委員会委員の教員

国語教育：梶村光郎／社会科教育：西岡尚也／数学教育：前原潤／理科教育：田吹亮一／  
音楽教育：山内行榮子／美術教育：小林豊／保健体育：金城文雄／技術教育：福田英昭／  
家政教育：田原美和／英語教育：山内進／教育学：望月道浩／学校心理学：廣瀬等／  
児童教育：小田切忠人／障害児教育：田中敦士／日本語教育：高橋美奈子／  
情報教育：仲間正浩／生涯健康教育：笹澤吉明／島嶼文化教育：片岡淳／  
教育カウンセリング：伊藤義徳／自然環境教育：馬場壮太郎

★問1～問7は、右端にある回答欄の対応する数字を黒くぬりつぶして(例：●)回答してください。

問1. 所属の課程を回答してください。

1. 学校教育教員養成課程    2. 生涯教育課程

回答欄	
①	②

問2. 学年を回答してください。

1. 3年次    2. 4年次

①	②
---	---

問3. あなたは教員志望ですか。

1. まったく志望していない    2. あまり志望していない  
3. 少し志望している    4. 非常に志望している    5. わからない

①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---

問4. 今年度、1回でも認定試験を受験しましたか。

1. 受験した    2. 全く受験していない

①	②
---	---

問5. 今年度、1回でも認定試験の「解説セミナー」に参加しましたか。

1. 全く参加していない    2. 少し参加した    3. よく参加した

①	②	③
---	---	---

問6. 認定試験は、教員になるための意欲を高めると思いませんか。

1. まったく高めない    2. あまり高めない    3. 少し高める  
4. 非常に高める    5. わからない

①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---

問7. 認定試験は、教員になるために役立つと思いませんか。

1. まったく役立たない    2. あまり役立たない  
3. 少し役立つ    4. 非常に役立つ    5. わからない

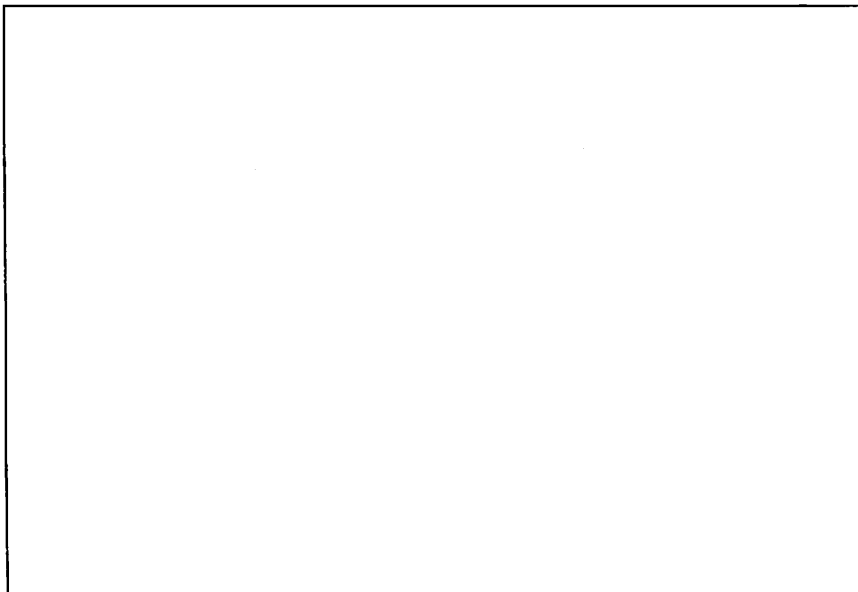
①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---

※質問は裏に続く→



★問8～問9は自由記述で回答してください。

問8. 認定試験についての意見、要望等を自由に回答してください。



問9. 大学や学部に望む、教員候補者選考試験に向けての就職支援についての意見、要望等を自由に回答してください。



★アンケートは以上で終わりです。

提出期限(2/18)までに所属の学生生活委員会委員の教員に提出してください。